



オリーブ便り400号発刊を記念して

オリーブ便り編集責任者 日下 隆

今回は1983年10月20日に発刊された香川医大病院ニュース第1号を3・4頁に掲載します。その後病院ニュースは毎月発行され、現在400号を超えるまでに月日が経過しました。香川医科大学は1978年10月に開学し、1980年4月に第一期生の入学を迎えています。附属病院はその3年後の1983年に設置され、10月から診療を開始しました。同年は東京ディズニーランドが開園し、NHK朝の連続テレビ小説『おしん』が放送開始された年でもあります。

最初の記事を見てみますと、附属病院開院式には前川忠夫前知事をはじめ多くの関係者の方々が出席し、新たな医学教育への熱意と地域医療への大きな期待感が感じられます。また玄関岩の写真をモディファイした「アングル」など、手作り感満載の親近感のある記事の工夫が見られます。記念すべき創刊号のため、その準備のため皆で様々なアイデアを出し話し合っている様子が目に浮かぶようです。このようなチームのパイオニア精神とこれまでの長年の地域貢献を継承し、香川大学医学部附属病院チームとして周囲の皆様に貢献出来るよう、未来に向かって歩んでいきたいと考えています。

手術体験セミナー開催

手術部 副部長 北村 裕亮

酷暑が続く中、8月19日に手術体験セミナーが開催されました。このセミナーは、実際の手術で使われる手技を模擬体験し、医師という職業に興味を持ってもらうために行われています。今年は県内10校から34名の高校生に参加して頂きました。はじめに、横見瀬病院長から、開会挨拶のお言葉を頂きました。全員で糸結びの練習をしたのち、各グループに分かれ、シミュレーターなどを用いた手術模擬体験コーナーを6つ廻ってもらいました。ランチタイムには、2名の医学生に手術実習の体験談を語って頂きました。

どのコーナーでも高校生たちは熱心に説明を聞き、楽しみながらも緊張感をもって操作をしていました。セミナー自体は好評で、手術や外科手技に興味を持ってもらうことができました。彼ら、彼女らとともに働く日がいつかくることを期待しております。

最後になりましたが、多大なるご協力を頂きました。各先生がた、医学部学生、事務スタッフの方々に心から御礼申し上げます。



がんは社会の高齢化とともに増え続け、現在日本人の2人に1人ががんに罹患し、3人に1人はがんで命を失うとされています。

がんはどんな病気? “がんの治療は進歩しているの?と”思っていることと思います。

実はがん治療はここ数年で長足の進歩を遂げつつあります。

効かない、きつい、つらいといったイメージが強かったくすりの治療ですが、新薬や副作用を抑える薬の開発で、効果も副作用も以前とは比べられないほど良くなってきました。

特に分子標的薬(ぶんしひょうてきやく)といった、がんの遺伝子異常を治すことでがんを良くする薬や、弱っていた免疫の力を復活させ、がんをやっつける免疫チェックポイント阻害剤(めんえきちえっくぽいんとそがいざい)といった薬などの開発は、がん治療に革命を起こしました。さらにゲノム医療といわれるがんの遺伝子タイプを調べることを組み合わせることで、難治と言われたがんでさえも、元気で長生き、さらには完治できる方も珍しくなくなりつつあります。

今後、多くの方に最高のがん治療を安心して受けていただきたいと思います。

いい治療を受けるためには?!

- まずは主治医とよく相談。
- 分かりやすい言葉で、30分以上かけて説明をきく。
- セカンドオピニオンも是非。
- **治療開始までによく話し合う。**
- 検査の度に説明をよく聞く(ぜひ家族と一緒に)
- 十分準備して(精神的、社会的、肉体的に)治療を開始してもらう。
- 無駄に我慢することは、治療効果を弱めるので、無理せず、必要なときのために体力・気力を温存。

がんにならない、がんで死なないためには

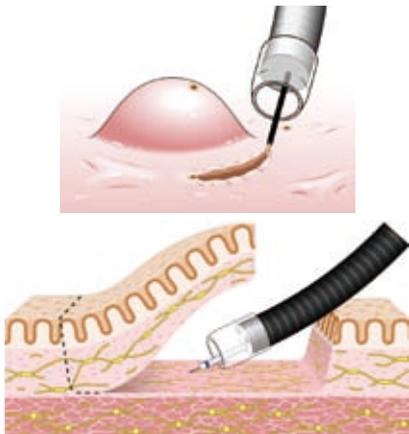
発がん因子：食物35%、たばこは30%

- **禁煙**
- **食塩摂取量の減少** 目標値：10g未満 基準値：13.5g
- **野菜の平均摂取量の増加** 目標値：350g以上 基準値：292g
- **果物類を摂取の増加**
- **脂肪エネルギー比率の減少**
- **アルコール約60gを越え多量に飲酒する人の減少**
- **早期発見のための検診**

※第30回イキイキサぬき健康塾(平成29年11月26日開催)の講演内容を要約したものです。

「内視鏡でみえる・なおる胃腸の早期がん」

がんの早期発見・治療の重要性が社会に浸透してきた昨今では、消化器内視鏡のニーズが増えています。同時に、医療技術革新がもたらした高画質・拡大機能を備えた内視鏡スコープの登場により、消化管がんの初期段階での検出能及び質的診断能が飛躍的に向上しています。これらの高い診断能と並行して、早期消化管がんに対し、大きな一塊の切除が可能な内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD:Endoscopic submucosal dissection)は、電気メスを使った低侵襲的治療として位置づけられています。当院は、これらの最新の内視鏡手技を特色としてきました。県内外のあらゆる地域からESD目的に数多くのご紹介を受け、高い内視鏡技術の提供に尽力しております。治療成績は、多数の治療経験のある内視鏡専門医が、全国のハイボリュームセンターと遜色ない成績を残しています。このたび、第31回イキイキサぬき健康塾-香川大学病院と最新医療「内視鏡でみえる・なおる胃腸の早期がん」のテーマで市民に以下のようにお話しさせていただきました。毛細血管の赤血球の動きや、がんの微細な血管がみえる



内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)

顕微鏡のようなカメラが開発され、'見えなかったものがみえる'ようになり初期がんの早期発見が可能になりました。また、ESDという'臓器を温存してなおる'日本発祥の治療もうけられます。もし万一、合併症が発生しても、孔を閉じる最新の医療機器で救済できるようになっており、より安心して治療を受けることができます。最新の内視鏡技術により、検診して早期にがんを発見できれば、身体に負担の少ない治療法で「がんはなおる・怖くない」という締めくくりで、内視鏡写真や動画を数多く用いた内容に内視鏡の進化を感じてもらえたと実感しております。「心のコモった(思いやりのハート)確かな技術(卓越したアート)で、治す」をモットーに、良質・安全・高度な内視鏡医療を地域に提供するという大学病院としての使命を果たすことに努めています。

※第31回イキイキサぬき健康塾(平成29年12月10日開催)の講演内容を要約したものです。

香川医科大学 香川大 病院ニュース

発行 香川医科大学附属病院
香川県木田郡三木町池戸1750-1
発行人 院長 恩地 裕

1983年10月20日第1(発刊)号

夜来の雨もあがり、昭和58年10月14日、10月中旬のさわやかな朝、待望の開院式が予定通り施行された。すでに、当日に至るまで、職員全員の準備態勢万全のうちに、午前10時過ぎには続々と県内外より来賓が到着。紅白の幕を背景に受付係は緊張の面持ち、高松駅からの特別バス2台も到着して、午前11時から式典は開始された。

大学体育館には、全国的な医大関係者、地元の議員をはじめ、前川知事ら、およそ六百名が出席。砂田輝武学長の式辞のあと、文部省大学局、前畑安宏医学教育課長のあいさつ、前川知事、久米川県医師会会長などが祝辞を述べた。最後にわがグリークラブの面々が新しくつくられた香川医科大学校歌を披露した。式典ののち、出席者は新装の附属病院玄関前へ移動。全員の見守るなか、学長、来賓らがテープカット。五色の風船が秋空に舞い上がり、「開院」を色どった。つづいて所定のコースをたどり、院内の諸施設の見学が行なわれた。つづいて午後一時より体育館において来賓の祝賀パーティーに移り、はなやかなムードと将来への期待の交錯するなか、式典は終了した。



“地域医療、教育、研究の総合的發展を” 学長、職員祝賀パーティーで強調

午後3時より、職員のみによる祝賀パーティーが同じく体育館で行なわれた。ほとんどの職員が参加するなか、学長は本日に至るまでの職員の努力を労としてねぎらったのち、本学の持つ将来への決意と抱負をあつぱく職員に訴えた。すなわち、病院の開設をもって、或る地点に到着した。この地域医療の開始はもっとも重要な出来事のひとつではあるが、本学はもともと学生の教育という大きな任務を有している。かつまた、研究の推進はもとよりのことであり、臨床の診療や研究をささげていく上において、本学基礎教室の強い基盤が必要であると力説。

祝賀の立食パーティーは事務局長乾杯の音頭でスタート。事務女子職員、看護部門などの華やかな同席もあってか、次第にムードは最高潮、遅い(?)昼食も手伝ってアルコール濃度も急上昇。2時間の談笑の後、未来への夢をこめて、それぞれのグループに分かれ秋の夕間の中に閉宴した。

待望の附属病院開院式 地域の期待を担って県内外より600名が参列



発刊によせて

学長 砂田 輝武

世は情報化時代。人びとは地球の裏側の出来事も直ちにテレビを通じて見ることができ、結構なことだという。その一方で目まぐるしい情報の攻勢に追いまわされ、その気ぜわしさはやりきれないと愚痴をこぼす。この複雑な世相が今の時世なのかも知れない。

ともかく、世界は近くなり、必要の有無を問わず、世界中のこと、国中のことがたやすく目にし耳にしうる時代である。こんなわけで、身に遠いことに明るく、世間の事情にもよく通じているのだが、燈台下暗しというが、案外身に近いことには却って暗く、身近で起こっていることを知らないことが多いものである。大学内でも当然多くの人びとが知っているはずのことが知られていなくて、むだな誤解を招いたり、物事が円滑に運ばなかったりすることがある。違った職場で働いている人びとの立場とか現状をお互いによく知り、理解しあうことがきわめて重要なことを感じる。

この意味で、この度、学内外の期待を担って10月14日開院したばかりの本学の附属病院内に「香川医大病院ニュース」が発行されることになったことは、まことに結構なことだと思ふ。端的にいえば、院内で働く方がたに病院をよく知ってもらいたいというところに病院ニュース発刊の主旨がある。

「愛することは知ることである」の言葉の通り、知らないものには愛情を感じることはできない。知ることによって病院に対する愛情が芽生え、大学病院が自分たちのものであるという自覚がより深まるのではないだろうか。

大学病院は大世帯で、機構は複雑、構成員も多くの職種の人びとから成立っている。仕事も教育、研究、診療に加えて、地域の医療機関としての任務、患者さんへのサービス業務などその内容は複雑で多岐多様にわたっている。こんなわけで、現実の問題として、今病院がどんな方針で行動しており、部局がどのように対処しているかは、院内の個個の方がたは案外知らないことが多いように感じられる。

病院にいて病院のことがわからないのでは、現状を案じることもできないし、将来を語ることもできない。病院の現状、将来計画をありのまま伝えることによって、その実態を皆のかたに知ってもらって、より一層連帯感を密にし、病院運営に協力いただき、よい病院にしてもらいたいというのが、この病院ニュース発刊に際しての私の期待である。

この病院ニュースを定期的に発行していくことはなかなか骨のおれることことだが、これに当たられる方がたの尽力を願うとともに、これが期待する役割をつとめてよりよい病院づくりの一端を担い、有意義なものとなることを祈ってやまない。

名科登場

第1内科の巻

室内楽からオーケストラへ、愛、和、創造をモットーに

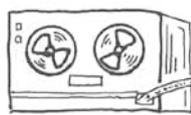
第一内科学は、昭和55年4月、私(入野昭三)と河西浩一助教授(現、本学中央検査部教授)の二人で開かれ、現在、高原二郎助教授、倉田典之講師、石田俊彦講師、田村敬博、塩谷泰一、田中輝和助手の7名である。私は、初代の講座開設に当って、愛、和、創造をモットーとして、その育成に全力投球をしたいと思っている。良い臨床医であるためには、人間性豊かな、相手(患者)の立場にたつて常に物考える習慣が身につけている必要がある。個性の強い医師の集団では、その人数が多くなればなる丈、人の和が重んぜられなければならない。大学人は臨床であれ、研究であれ、国際的に通用する originality がなければならないといった考えからである。教授は指揮者であるべきであり、室内楽から早くオーケストラを指揮するようになりたい。幸いよいスタッフに恵まれてスタートできたことを喜んでいると同時に魅力ある「第一内科学交響楽団」作りに専念したい。

第一内科の担当分野は、血液疾患(入野、田村、田中)、呼吸器疾患(入野、塩谷)、内分泌疾患(高原)、代謝疾患(石田)、膠原病アレルギー疾患(倉田)である。血液疾患では各種貧血、白血病、悪性リンパ腫、骨髄腫を主とし、クリーン・ルームを作って骨髄移植が行えるよう骨髄移植チームを組んでいる。呼吸器疾患は、特に肺癌に主力をそそぎ、外科、放射線科とタイアップして集学的治療を行う予定。内分泌疾患では小脳症、内分泌性高血圧症、甲状腺疾患を、代謝疾患としては糖尿病の診療を主として行う。膠原病・アレルギー疾患としては、SLE、関節リウマチのほか各種膠原病の治療を行い、特に、免疫疾患の血漿交換療法は積極的にとりくむ予定である。

■主な研究テーマを列挙すると、

1. 白血病、悪性リンパ腫の病因、病態と治療(骨髄移植を含む)
2. モノクローナル抗体の作成と、血球の分化、成熟、白血化の解析
3. heterophile antibodyの病態生理学的意義の解明
4. 造血組織の立体構築と血球動態に関する免疫走査電顕的研究
5. 肺癌の早期診断と免疫化学療法
6. 視床下部、下垂体疾患の病態生理、プロラクチンの放出機構、視床下部ホルモンとその分泌調節、ステロイドホルモンの作用機序
7. 膵ホルモンのホメオステシスに関する諸要因の解析、特に膵ホルモンの肝における取り込みの機序ならびにその生理学的意義の解明
8. 膠原病における腎、リンパ組織の免疫、病理学的研究、抗ヒストン抗体の検出、SLE患者の網内系機能とリンパ球の核酸代謝、免疫複合体における特異抗原の証明

(入野昭三、第1内科科長)



電算室・コンピューター (1) 病名マスタが完成するまで

コンピュータであるシステムを開発しようとすると、そこで使用される用語の一覧表を作らねばならない。

本院では病名登録を行い、コードで入力したものが、外来基本カードやレセプトには漢字の病名となって出力されるようになった。病名マスタ作りの作業は一年半前に始められ、ようやく開院に間にあったことでも判るようにマスタ作りがシステム開発過程に占めるウェイトは大きい。

各科の病名を全部集めたら一体いくつあるのだろう。病名は極端に言えば患者1人1人違っているもので無限にあるとも言える。けれど日常よく使われるものは必しも多くない。マスタにはなるべく多数を網羅しておき、日常汎用のものは、科毎に一覧表を作っておく。また入力時にカタカナで打鍵して病名コードを探すことも考えねばならない。

病名登録を正確にしてあれば学術的にも価値が高く、後日のカルテ検索、統計処理に利することは明らかである。

外来基本カードに出力された病名が、患者の目にとまっても構わないように守秘病名も設けねばならない。

後日の検索用統計用コードとして国際的

に通用しているICDコードも入れておくべきだが、それを入力コードとして使うのは不適當であり、本院独自の香医大コード(5桁連番)を付す作業も加わる。

最初のベースとしてF社提供の7,000病名に加え、各科希望の5,000病名が加わり、各科との打合せを繰返すうちに現在は12,720病名に達した。

その中から各科の診察室で使う汎用病名を選び、そのシートを出力できたのが、開院も間近い9月の終りであった。ここまで出来た際には中診事務職員の3ヶ月に及ぶ突貫作業があったことを申し添え、改めて感謝の意を表したい。

ただ電算室としてはこれから諸先生が実際に使って頂き、誤字があればその都度届け出され、もし追加すべき病名があれば申し出て頂き、より完全な病名マスタにして行きたいと思っている。汎用シートも1年後位には作りなおすことになると思われるので、日常使い勝手をよくするにはどうあればよいか考えておいて頂きたい。汎用シートの内容をパソコンのフロッピーディスクに入れて各科に提供できるのも近い将来であろう。

酒井俊一(耳鼻咽喉科科長)

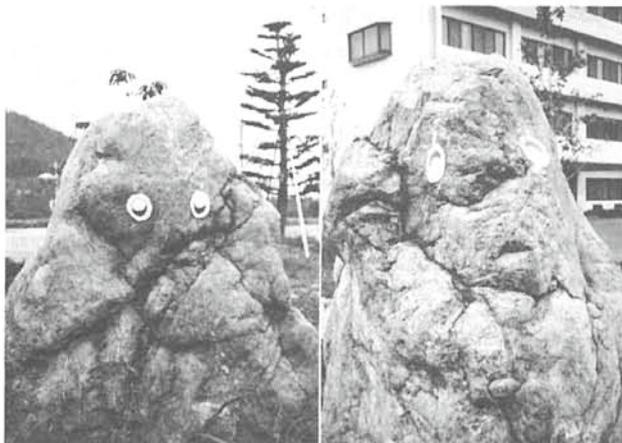
おしらせ・アラカルト・おねがい

【電話1】診療、講義、会議、出張などの場合、無人の室にいつまでもリンリンと響いているものかどうかと思います。どうぞ所定の室(秘書室など)に電話転送して下さい。例:71-〇〇〇〇(〇印が4桁の希望室番号)これは夜間24時にキャンセルとなります。

それ以前に自宅の番号に戻されたい方は79を回して下さい。その他EX30M電子交換機の手引をよく読んでフルに活用して下さい。

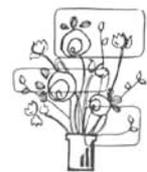
【電話2】来たる11月30日より、局番08789は、高松局共通の0878となります。

【交通】開院日より、琴電高田駅より、病院構内まで、昼間36往復バスの便が確保されることになりました。時刻表その他詳細は庶務課まで(内線2119)。



アングル

病院入口の石。入院時のゆううつな表情(左側)も、やがてあかるく喜びに満ちたものに(右側)！そうあるように職員一同頑張ります。



編集後記

ここに、香川医大病院ニュース第1号をお送りする。恩地院長の発案ですめられたこの企画に、色々の方面から激励や貴重な示唆をたまわった。初期の計画は耳鼻科の酒井がおこし、大本(脳外科)、竹中(泌尿科)、戸谷(小児外)、細川(精神科)が編集に加わった。この病院ニュースは月に1回発行をめざして進みたい。

病院内外の各種の情報を皆さんにお届けするのが最大の目的にしたい。従って、あくまで「ニュース」を主体とする。しかし、将来はできるだけ、意見交換の場として本紙を御利用されて差支えない。オープンな構えで、全員の物になるように運営したい。世は情報社会である。情報化、情報過、情報禍は困る。情報花、情報華、情報葉であらねばと思う。よろしくおねがい申し上げます。(編集委員:大本、酒井、竹中、戸谷、細川、西山<庶務>) 文責:細川。

四国新聞社の記事転載について、ホームページでの公開には
許諾されていないため、転載記事を除きました。

四国新聞 2018年(平成30年)3月3日(土)掲載 (四国新聞に掲載について許諾済み)

 イキイキさぬき**健康塾**
香川大学医学部附属病院 医療セミナー

高松市内で定期的に行っている医療セミナー「イキイキさぬき健康塾」がケーブルメディア四国のコミュニティチャンネルで放送中です。実際にセミナーにご参加いただいた方の振り返りに、セミナー当日に参加できなかった方に、医療セミナーに興味のある方に、皆様ぜひご覧ください。

第11回香川県がん診療連携協議会を開催

医療支援課

平成30年8月10日(金)香川県社会福祉総合センターにおいて「第11回香川県がん診療連携協議会」を開催しました。この協議会は、都道府県がん診療連携拠点病院である本院を中心に、県内の地域がん診療連携拠点病院(香川県立中央病院、高松赤十字病院、香川労災病院、三豊総合病院)、香川県及び香川県医師会、四国こどもととなの医療センターが香川県におけるがん診療連携の強化及びがん医療の均てん化の推進を目的とし、毎年開催しています。



横見瀬病院長が議長・進行を務め、院内がん登録部会がん登録実務者会の設置が承認されました。また、相談支援部会におけるがん相談支援センター相互評価の実施報告、各部会(地域連携・パス、院内がん登録、相談支援、緩和医療、研修・教育、情報・広報)の平成29年度の事業実施報告、香川県より、がん対策推進事業報告がありました。

今後がん医療の水準の向上を目指し、県内におけるがんの発症予防、がんの早期発見、早期治療を強化することを確認し、閉会しました。

第十七回卒後臨床研修指導医養成講習会の開催報告

卒後臨床研修センター長 松原 修司

去る8月25日(土)・26日(日)の2日間、第十七回香川大学医学部附属病院 卒後臨床研修指導医養成講習会を開催しました。

指導医養成講習会とは、研修医を受け入れ指導する病院側の指導者養成を目的とした講習会です。開催については、厚生労働省の指針にのっとり開催することが規定されており、報告書の提出も求められています。

今年度も、齋藤 宣彦先生(医療系大学間共用試験実施評価機構 副理事長)を中心に講習内容を企画いただき、世話人の先生方(8名)の指導のもと、本院23名および県内の協力型臨床研修病院5施設より7名の計30名の先生方が受講され、厚生労働省医政局長認定の修了証書を授与いたしました。指導医として認定される全国共通の資格であり、指導医の養成を通じて、県内の研修医の育成体制の充実にもつながっております。また、今回は、2020年度からの卒後臨床研修制度見直しにおける360度研修医評価の実施を踏まえ、本院看護師5名の方にも受講いただけました。



特別講演では、田中 信一郎先生(中国四国厚生局健康福祉部医事課臨床研修審査専門官)、東 善博 課長(香川県健康福祉部医務国保課)よりご講演を賜りました。卒後臨床研修制度の見直しならびに、県行政における医師養成・確保施策の現状と今後の方向性に関して、理解を深める貴重な機会となりました。今後も、指導医育成を通して、香川県の地域医療の充実に貢献できる医師育成に努めてまいります。

ご協力いただきました関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

イベントカレンダー H30.10~11月 予定表

月日	時間	場所	名称及び内容	担当	連絡先
10/4 木	14:00~15:10	西1階カンファレンスルーム	【糖尿病教室】 管理栄養士と医師が話をさせていただきます。	臨床栄養部	(087)891-2066
10/7 日	13:30~16:45	三木町防災センター	平成30年度日本肝臓学会 肝がん撲滅運動 市民公開講座	消化器内科	(087)891-2156
10/14 日	11:00~12:00	丸亀町レッツホール	イキイキさぬき健康塾-香川大学病院と最新医療 「『知らんけん 教えていた!!』香川の腎臓移植と脾臓移植」	総務課	(087)891-2008
10/18 木	14:00~15:10	西1階カンファレンスルーム	【糖尿病教室】 管理栄養士と薬剤師が話をさせていただきます。	臨床栄養部	(087)891-2066
11/8 木	14:00~15:10	西1階カンファレンスルーム	【糖尿病教室】 管理栄養士と医師が話をさせていただきます。	臨床栄養部	(087)891-2066
11/11 日	11:00~12:00	丸亀町レッツホール	イキイキさぬき健康塾-香川大学病院と最新医療 「頭部外傷後に起こりうる疾患-頭部打撲後…いつもと違う?」	総務課	(087)891-2008
11/15 木	14:00~15:00	西病棟1階カンファレンスルーム	カフェ「おりぶ」 ※参加者でお茶を飲み語らう場	がん相談支援センター	(087)891-2473
11/22 木	14:00~15:10	西1階カンファレンスルーム	【糖尿病教室】 管理栄養士と検査技師が話をさせていただきます。	臨床栄養部	(087)891-2066

編集委員会 (50音順)

荒井(検査)、大高(医療支援)、加賀宇(総務)、岸野(病棟)、日下(副病院長)、笹川(放射線)、田川(管理)、田中(看護)、富田(経営)、濱本(外来)、芳地(薬剤)、横井(情報)、吉野(医事) [委員長 横見瀬病院長]